私立大学における社会学教育・研究の役割
―関西学院大学から日本大学に向けて―

荻　野　昌　弘

1915年から1920年にかけて、東（日本大学）と西（関西学院）で、社会学科が誕生する。関西学院は、1912年に専門学校となり、その3年後に、社会学科を創設する。また、1918年に制定された大学令に基づき、日本大学は1920年に大学となるが、その際に社会学科を創設している。ちなみに、関西学院が大学となるのは、1932年のことである。ほぼ同時期に、専門学校と大学という制度上の相違があるとはいえ、社会学科という名称を冠する教育研究組織が誕生したのは、単なる偶然にすぎないのか。それとも、隠された社会学的意義があるのか。本論は、同時期に、私立学校・大学において、社会学科が誕生したことは、この時代が大きな転換期であり、しかも、その当時、創設に携わった先駆者の問題意識は、現代においても失われておらず、それどころか、あらためて、この問題意識を評価する意味があるという観点に立ち、そのための試論を提示する。

１．関西学院における社会学科創設

関西学院は、高等学部文科と商科が1912年に創設され、小山東助が文科長に就任する。ただ、文科は人気がなく、学生も集まらなかった。そこで、小山は、文科に英文科、哲学科、社会学科を設けることにした。この三つの学科のなかでも、小山は、とりわけ社会学科創設にこだわりをみせた。ミッションスクールには、ソーシャルワーカーの養成や、「総合的社会指導理論把握」の必要性から、社会学科が不可欠であるとして、当時、漠然としたイメージしか喚起できなかったであろう社会学科の名称を、異論を排して採用したのである（関西学院大学社会学部 1995：8）。小山は、旧制二高から東京帝国大学哲学科を卒業し、新聞記者、早稲田講師を経た後に、関学に着任しているが、吉野作造同様、組合教会の海老名弾正門下で、キリスト教と大正デモクラシーが深い関係にあったことを如実に示す人物の一人である。

小山は、政界に進出するため、関学を去り、その後、1918年に社会学科の唯一の専任教員として、河上丈太郎が赴任する。父の代からのクリスチャンだった河上は、東京帝国大学法科大学政治学科卒業後、立教講師などを経て、関学に着任し、10年ほど関学教授を務めた後、1928年、日本における初めての普通選挙で、衆議院議員となる。その後、太平洋戦争末期には、一時期、関学の理事長に就任しており、関学と深いつながりがあった人物である。戦後は、1961年から5期社会党委員長を務めた。河上は、関学着任後、自らは法学関連の科目を担当し、社会学については、1919年から2年間、集中講義を担当してもらうため、当時『社会学原理』を刊行したばかりだった広島高等師範学校の高田保馬を招いた。高田は京都帝国大学において米田庄太郎の下で社会学を学んでいるが、米田はクリスチャンとして、1895年、22歳で渡米し、当初は神学校に入学するが、社会学を学ぶため、まもなくコロンビア大学に移り、フランクリン・ヘンリー・ギディングスに師事した（斎藤 1976：230）。その後、パリに渡り、ガブリエル・タルドにも師事している。

その後、1921年にようやく社会学の専任教授として、東京帝国大学法学部政治学科を卒業したばかりの新明正道が着任した。新明は、1978年の関学社会学部講演会で、「政治学はともかく、社会学については皆目無知同然の有様でしたから、関学に来てからは自分の勉強時間の大半を社会学の研究にあてて手当たり次第内外の社会学書を買い求め、これを読み終わるとすぐ一夜漬の知識を学生諸君の前に吐き出し（新明 198：15）」と語っている。のちに社会学者として名を成す新明が、本格的に社会学に着手したのは、関学で社会学を教え始めた時からであることがわかるが、着任した1921年の11月には、『社会学序説』を上梓している。また、新明は、東京から長谷川如是閑や大山郁夫を招いて講演会を開催している。長谷川、大山は、吉野作造と並び、大正デモクラシーを代表する論客であり、1919年にフリージャーナリズムの草分けである雑誌『我等』を創刊していた。1923年には、東京帝国大学法学部政治学科を卒業し、大阪市社会部に勤務していた松沢兼人が着任し、社会政策を講じることになる。松沢は、吉野作造に師事し、戦後は、日本社会党員として、衆議院議員、参議院議員を歴任した。

一方、河上は、賀川豊彦と交流を始めていた。賀川は、神戸神学校在学時から葺合新川のスラム街で布教活動を行なっており、プリンストン大学

に留学後、1917年に帰国した。1919年には、友愛会関西労働同盟会を結成し、1920年には神戸購買組合を立ち上げている。賀川は、留学前から、関西学院の図書館に足繁く通っており、1910年に関西学院に着任した宣教師C.J.L.ベーツと交流を始め、新川における賀川の布教活動に関学神学部の学生も加わっていた。賀川は、ジョン・ウェスレーの『信仰日誌』を翻訳、刊行しているが、その原書は、ベーツから手渡されたものである。ベーツと賀川は、ともに、キリスト教が社会的な宗教であるというウェスレーの思想を信奉していた（趙 2017：64）。

1920年、第4代関西学院院長に就任したC.J.L.ベーツは、賀川を高く評価し、交流は、賀川の死まで続き、賀川は、何度も関学で講演を行なっていた（写真1）。このようななかで、河上は賀川との知己を得た。社会学科の専任教員である河上、新明、松沢の3人は、賀川が1922年安治川教会に開校した大阪勞動學校の講師を務めている。開校後、最初の講義は新明による社会学の講義だった（中村 2015：55）。

写真1　賀川豊彦講演会（1929年）の際に行われた，関学中央講堂前での記念撮影。中央に賀川と，ひとり挟んでベーツが写っている（神戸・賀川記念館提供）。

関学で社会学科が誕生した時代を見ると、いくつかの興味深い点が見えてくる。それは、ミッションスクールと社会学、労働運動を含む社会運動にある密接な関係である。

2．ミッションスクールと社会学

関西学院で社会学が講じられ始めたのは、記録が残っている限りでは、1904年からのことである。担当は宣教師のT.H.ホーデンで、社会学科創設以前には、宣教師が神学部で社会学を教えていたことがわかる。米田が師事したギディングスの著書が教科書として用いられており、科目名は「ギディングス氏 社会学」だった。ちなみにベーツも何度か社会学を講じている。つまり、社会学は宣教師のあいだでまず科目として採用されていたのである。それでは、なぜ宣教師たちは、社会学を講じる必要性を感じたのか。この点について、新約聖書の一節を引用しながら、考察してみたい。それは、ルカによる福音書10章の30節から34節である。

> イエスはお答えになった。「ある人がエルサレムからエリコに下って行く途中、追いはぎに襲われ、追いはぎはその人の服をはぎ取り、殴りつけ、半殺しにしたまま立ち去った。ある祭司がたまたまその道を下って来たが、その人を見ると、道の向こう側を通って行った。同じように、レビ人もこの場所にやってきたが、その人を見ると、道の向こう側を通って行った。ところが、旅をしていたあるサマリヤ人は、そばに来ると、その人を見て気の毒に思い、近寄って傷に油とぶどう酒を注ぎ、包帯をして、自分のろばに乗せ、宿屋に連れて行って介抱した（共同訳聖書実行委員会 1988：126-127）。

これは「隣人」とは誰かを巡るイエスと律法学者との議論のなかで、イエスが語ったエピソードであるが、このなかに社会学につながる含意がある。それは、ユダヤ人ではなく、サマリア人が見知らぬ他者を助けた点である。祭司さえ、避けてしまう瀕死の人間を救うのは、ユダヤ人ではなく、サマリヤ人である。ちなみに、サマリア人は、1－2世紀おいてはユダヤ人内部の分離グループか、他民族の改宗者と見なされ、2世紀以降は異邦人とされたひとびとである（大宮 2011：35）。ここには、隣人とはすでに親密な関係にある存在を指すのではなく、道で倒れている状態を見る

まで出会うことがなかった、しかも自らとは異なる社会集団に帰属する存在もまた隣人になりうるという考え方がある。それどころか、瀕死の人間がいたら、その人物こそが隣人でなければならない。

社会学的想像力は、ある特定の社会集団内部の視点にとどまる限り、生まれない。それは、集団外部の存在を捉え、あるいはまた、集団外部からある集団を観察することができなければ、社会学的想像力は誕生しない。このような視点に立てば、イエスが語るサマリヤ人のエピソードは、他者を捉える社会学者の視点を兼ね備えていると言える。

キリスト教と社会学の関わりにおいて、もう一点重要なのは、自由の問題である。関学社会学部の学部モットーは、ヨハネによる福音書 8 章の「真理はあなたたちを自由にする」であり、それは社会学部チャペル内にも掲げられている。ちなみに、この箇所は、国立国会図書館にギリシャ語と日本語で掲げられており、日本語では「真理がわれらを自由にする」と記されている[1)]。これは、イエスが語る「真理」を信じないユダヤ人たち対して投げかけた言葉であるが、広義に解釈すれば、真理を受け入れることができず、頑迷なままでいる人々は、結果的に「真理」を語り続ける存在を迫害する方向に向かうということであろう。このユダヤ人たちは、最後には、イエスに石を投げつけようとしている。社会学的想像力の視点は、他者が語る「真理」に耳を傾けることができるかどうかという点にある。

3．関西学院、キリスト教と社会実践

社会学科が誕生した当時、関西学院は神戸の原田の森にあった。当時のチャペルはまだ残っており、現在は神戸文学館として利用されている（写真 2）。作家の稲垣足穂は、1914 年から 19 年まで関西学院普通部（旧制中学）に通っており、その時の様子を『古典物語』で描いている。それによれば、当時の関西学院は、「赤いスレートの急斜面にストーブの煙突を並べた多理らの校舎は、背後の山際から眺めると、十二月の玩具店の飾窓にある紙製の家を彷彿とさせ」「その光景は、画家の額縁中に捉えさせたい類いだった」（稲垣 1973：351）。これは、当時の関西学院が一種の異空間だったことを示している。

「多理」はこの小説の主人公で、稲垣足穂自身がモデルである。多理は、文学，美術から物理学に至るまで、さまざまな分野に興味を持っており、例えば、休憩時間に物理の問題に関して先生と生徒の間で議論すると

写真２　関西学院旧チャペル。現在は，神戸文学館となっている。

いうことが普通に行われていた光景が描かれている。そして、『古典物語』の最後では、多理＝足穂が、これまでの自分の行動は、自ら自由に選択していたと思っていたが、それは、実は学院がそのような環境を整えていたからだと述懐している。

しかし、こうした自由な学校から徒歩で海側に向かうと30分足らずで、新川に到着する。そこには、額縁に納めたいような原田の森の光景とはまったく異なる空間が存在していた。それは、賀川が住むスラム街である。新川にスラムが形成されたのは、「人足屯所百人部屋」と「屠殺場」が新生田川の川尻に移転された1880年代だと言われている（鳥飼 1988：43）。賀川は、神戸神学校在学中からスラムの人々の支援を行い、関西学院の学生たちと、スラムの子供たちのための林間学校を開催したりしていた。

ここで、あらためて、ルカによる福音書におけるサマリア人に関する逸話を取り上げよう。そこには、もう一点重要な点を見出すことができる。それは、サマリヤ人が「近寄ってきてその傷にオリブ油とぶどう酒とを注いでほうたいをしてやり、自分の家畜に乗せ、宿屋に連れて行って介抱し

た」という記述である。サマリヤ人は、即座に瀕死の病人を「介抱」している。そこに、疑念の余地はない。躊躇することなく、サマリヤ人は身体的に他者と向き合う。葺合新川における賀川の活動や、それに共感した関学の教員、学生たちの実践は、このサマリヤ人につながる。社会学科が創設された時期から、社会学は机上の学問ではなく、実践を伴うものとして捉えられた。

４．灘購買組合と地域

賀川豊彦の活動は、スラムの支援から、労働運動、農民運動の立ち上げへと広がる一方で、地域における新たな経済のあり方を模索した。それは、一見、関西学院の社会学科の歴史と関わりがあるように見えないが、キリスト教的実践と地域の関わりがどのようなものであったかを知り、社会学的想像力が現実に根付いていく過程を示す点では、重要な意味を持っている。具体的には、1920年ごろから生まれる阪神間での住宅開発と、そこに移住してくる新住民が、地域を変えていく。そこでも、賀川は大きな役割を果たしている。それは、当時の住吉村（現在の神戸市東灘区）に、コープこうべの前身である灘購買組合が誕生したことである。この点については、山本剛郎の論文が非常に参考になる（山本 1996）。住吉村は、少数の地主と小作農から成る村だったが、日露戦争後から、観音地区が住宅地として整備され、住友吉左衛門をはじめとする資本家・企業経営者が移住する。企業家たちは、社交の場として観音林倶楽部を作り、頻繁に講演会などを開催していた。その中心にいたのが、平生釟三郎である。

灘購買組合が誕生するきっかけは、住民のひとりである那須善治が、財産を公共のために使いたいが、どのような方法があるかについて、平生に相談したことから始まる。平生は、賀川の協同組合の発想を那須に伝え、それに共感した那須は、自らの資産を灘購買組合設立のために提供する。賀川によれば、「社会改造」（賀川の用語）は、愛と連帯意識によって可能になる。経済面において、それは互助的な組織である協同組合を通じて行われる。協同組合が得た利益は、組合員の合議の下、公共的目的に用いられることが望ましいと賀川は考えた。こうして、1921年に灘購買組合が誕生する。当初の組合員は468名だったが、1930年には3,000名にまで増えている。

山本は、灘購買組合が成功した理由として、財政的裏付けや、那須のよ

うな行動力のある推進者がいたことに加え、「行動を支える明確な理念」があった点を挙げている。この理念は賀川の思想に根差している。また、興味深いのは、灘購買組合を生み出したのが、住吉村に移住してきた資本家・企業経営者とホワイトカラー層だという点である。「他者」との連帯を考える富裕層が、阪神間地域に居を構え、「協同互助の精神」に基づく購買組合を支えていたのである。こうした動きは、都市にホワイトカラー層が形成され、この階級が新たな居住地を選ぶとともに、そこで新たなコミュニティを作ることに強い関心を持っていたことを示している。しかも、そこには、民主主義への志向性が見られ、市民意識が芽生えている。もちろん、こうした富裕層の「市民」と新川のスラム街の住民がすぐに連帯することはできなかっただろう。しかし、都市に形成された下層プロレタリアートと資本家、労働者を、階級を越えて結びつけようとした賀川の試みは、マルクス主義のように階級対立を前提とした闘争とは大きく異なる。賀川の思想では、異なる階級の協同は愛によって可能になるわけだが、賀川は、特定の村落や国家によらない社会統合の可能性を追求しており、それは、市民社会と名付けることができるものであろう。

これは、社会学において、フランスでマルセル・モースが追究した贈与の精神にもつながる。モースも、ほぼ同時期に、賀川同様、労働運動に関わり、また、資本主義が浸透していくなかで、私的利益の追求とは異なる経済のあり方を模索していた。

5．松沢村の開発と日本大学予科文科の移転

賀川は、1923年、関東大震災が起こると、被災者支援のために東京に向かう。賀川が、徳冨蘆花の求めで、住み始めたのが、旧松沢村の上北沢である。この地域には、1913年に、京王電気軌道が笹塚－調布間で開通していた。そして、関東大震災後に、被害が比較的軽微だった京王線沿線に人口が流入してきた（永江 2017：17）。同時に、住宅地開発も進んだ。1924年に、台湾で住宅地開発を行っていた木村泰治が第一土地建物会社を設立し、上北沢に、桜並木を中心にした街路を整備した北沢分譲地を造成した。「上北沢の分譲地を購入した人々は、高学歴で収入が高めで安定した官僚、会社員、学者など上層中産階級（アッパーミドル・クラス）が多かった（越沢 2013：59）」。その結果、「高級住宅地としてのブランドを確立していった（永江 2017：49-50）」。1926年には、宣教師で明治学院教授

だったオーガスト・カール・ライシャワーが開校した日本聾話学校が、上北沢に移転した。賀川は1931年に松沢教会を設立し、伝道活動を始める。上北沢は、1920年代の都市郊外の住宅開発で、当時の高学歴の上層中間階級が移り住み、明治期になって流入したキリスト教文化に代表される、日本にはなかった新たな文化を積極的に摂取した。政治的にも賀川が説いたような社会主義の理念を受け入れることができるような進歩主義的な態度をとる傾向があった。

こうしたなか、日本大学予科文科が、上北沢からさほど遠くないところに位置している現在のキャンパスに移転したのは1937年である。当時、賀川と日大のあいだに何らかの関係があったかどうかは今後の課題であるが、東と西で社会学科を生んだ日本大学と関西学院のキャンパスがある地域に賀川豊彦が深く関わっていたことは興味深い事実である[2)]。

1920年の日本大学社会学科設立に尽力したのは、圓谷弘である。圓谷は、京都帝国大学で米田庄太郎の下、社会学を専攻し、1919年に卒業した。1927年に『社會學徒』の刊行を始めたのも圓谷である。その創刊号を見ると、当時は、日本の社会学に大きな影響を与えていたギディングズの「人類の生存闘争」という論文の翻訳が掲載され、またデュルケームの紹介エッセイが掲載されるなど、海外の社会学の研究動向を把握しようとする試みが見られる。関西学院と異なる点は、ロシアやマルクス主義に対する関心である。例えば、「勞農露西亜の群衆劇場」と題されたエッセイでは、ロシア革命後の演劇の変化について報告されている。1928年に第一回普通選挙が行われるなど、昭和に入っても、当初は大正デモクラシーが継承されるが、1920年に無政府主義者クロポトキンの論文を翻訳、発表した森戸辰男（当時、東京帝国大学経済学部助教授）が新聞紙法第42条により起訴され有罪となる森戸事件が起っており、言論の自由が保証されていたわけではない[3)]。この意味で、発刊当初の『社會學徒』は、多様性があったと言えよう。しかし、日中戦争が勃発する1930年代には、その多様性は失われていく。

6．国家と社会

大正デモクラシーの時代は、日本において「社会」への意識が目覚めた時期と捉えることができる。それは、『社会学徒』創刊号の永井亨の巻頭エッセイ「日本の社會學徒」に示されている。永井は、1903年、東京帝国

大学法科大学卒業後、農商務省及び鉄道省に勤務し、主に人口問題に関して、研究、政策立案を行った人物である。永井は、「一般日本の國民は國家あることを知って社會あることを知ら」ず、「國家と社會とは同一である」と考えている点を批判する（永井 1927：3）。この意味で、永井がいう「社會學徒」とは、国家とは別に社会が存在することを示していく存在である。永井は人口問題が、貧困、失業、「婦人問題」などの社会問題と深く関係しており、その解決のためには、「忠君愛国」のような国家道徳ではなく、社会道徳を構築しなければならないと考えていた（松田 2016：228）。

永井は、国家と社会を異なるものとして理解しており、いわば永井は、国家秩序とは異なる社会を発見したと言える。それは、国家が介入していない領域であり、資本主義が進展するなかで形成された複数の階級の存在を前提としている。新たな階級は、資本家・企業経営者、ホワイトカラー、ブルーカラー、下層労働者に分類できる。このうち、資本家・企業経営者とホワイトカラーが、異質な他者が「協同」するような社会の構築に自覚的だった階級で、永井や賀川、河上、ベーツ、平生らは、いわば新たな社会を構想し、その実現のために労を厭わなかったひとびとである。

ただ、残念ながら、社会への意識が広がることはなかった。反対に、1930年代に入ると、国家による統制は厳しくなっていった。日大や関学も、こうした状況に、適応するべく追い込まれていった。戦時期に、社会学者が戦争加担した例としては、東大社会学教室の教授だった建部遯吾の「日本主義社会学」が知られているが、社会学がどのように戦争に協力したかは、より包括的に研究されなければならないだろう[4]。丸山眞男は、「日本ファシズムの思想と運動」でファシズムの推進階級は、「中間層」であり、日本の場合、「小学校教員、僧侶、神官、小工場の親方、小地主」などが、暴動の関係者、右翼団体幹部に多く見られたと指摘している（丸山 2015：101）。ただ、これは「中間層」の第一類型であり、第二類型の「都市におけるサラリーマン階級」「文化人」「教授・弁護士」「学生」などは、ファシズムには、積極的に関与しなかったという。この中間層第二類型は、社会を自覚的に意識した層である。丸山は、なぜ、このカテゴリーを含む都市部に勃興した新たな階級が、ファシズムにほとんど抵抗することがなかったのかについては、明らかにしていない。また、丸山は、ファシズムを推進した軍部が、都市労働者の懐柔に関しては相対的に無関心

で、日本のファシズムが、農本主義イデオロギーであったことも、指摘している。しかし、なぜ、本論で新たな階級と呼ぶ、資本家・企業経営者、ホワイトカラー、ブルーカラー、下層労働者が、ファシズムの推進層ではなく、またファシズム運動の取り込み対象にもならなかったのかについては、さほどの関心は示していない。しかし、この点こそ、より問われていくべき問題である。

7．私立大学とりわけ社会学科の役割

昨今、大学を取り巻く状況は厳しい。また、2020年は、新型コロナウイルスの流行によって、オンライン授業が大幅に取り入れられ、講義形態をはじめとして、大学そのものが大きく変容しようとしている。一方で、忘れてはならないのが、内閣総理大臣による日本学術会議の会員候補者6名の任命拒否問題である。拒否理由を示すことなく、おそらくはこの6名が政府の方針に反対した過去があるというだけで、恣意的に任命を拒否するのは、ファシズムの手法に似ている。戦前の状況と現在を安易に比較するべきではないが、大正デモクラシーと呼ばれた時代に森戸事件が起こったことを思い起こすとき、政府による恣意的な意思決定が慣例化するリスクがないとはいえない。少なくとも、ある種の反教養主義が、次第に世界的に広がりつつあるのはたしかである。世論調査では、調査対象者は学術会議会員任命拒否問題に、大きな関心を示してはいない。また、この問題に限らず、ある種の「無関心」が浸透している。これは、大学も同様である。

> かつては、知的共同体であった大学で、いまや共同性は失われ、教職員はしだいにお互いに関心をもたず、また接触も極力避けるような集まり、一種の群れと化しつつある。この群れは、最低限の自己の縄張りさえ確保されていれば、周囲で生じるさまざまな問題には無関心でいようとする。そして、互いに無関心であることで、現実に存在する差異・区別を目立たないようにさせるのである。群れの「無関心への意志」は、おそらく社会全体に蔓延している（荻野 2020：85）。

こうした状況において、1920年代における社会の発見と、それを学術的に捉える教育研究機関としての社会学科が誕生したことは、あらためて研究するに値する。そして、この時期に生まれた協同・連帯の思想が、なぜ

国家によって圧殺されたのかについても、考察されていかねばならない。そこで、最後に、今後、深化されていくべき研究課題について見ておこう。第一の課題として、賀川に見られるような協同・連帯の思想は、いかなる条件において浸透しうるのかという点が挙げられる。阪神間地域においては、キリスト教が重要な役割を果したが、永井は、キリスト教教会とは関わりがなかったし、長谷川良信のように、仏教者の立場から連帯を説いた人物もいる。また、キリスト教が浸透すれば、連帯意識が広まるとも限らない。ただ、社会学とのつながりという点では、キリスト教的道徳が衰退するなかで、新たな連帯のかたちを求め、社会学を確立していったデュルケームやモースの問題意識と賀川のそれは近いものがある。社会学史研究としては、この点がより追究されるべきである。本論である程度示したように、1910年から30年にかけて、今ではほとんどその名が挙げられることはないギディングス が大きな影響力を持っていた。ギディングス は、ほとんどハーバート・スペンサーの社会学理論を踏襲している。一方で、1890年代から研究成果を出していたデュルケームの翻訳が出始めるのは、1928年の田辺壽利訳『社會學研究法』(刀江書院) あたりからである。つまり、本論で社会が発見されたと位置付けている1920年代において、デュルケーム学派は、まだ影響力を及ぼしてはいない。言いかえれば、協同・連帯の社会学的思想は、自生的に生まれたのではないかと想定することもできる。

第二の課題として、協同・連帯の理念は、いかにして地域に根付き、いかなる階級がこの理念を実践していくのかという点が挙げられる。阪神間地域や世田谷区は、この点を解明するうえで、重要なフィールドになるはずである。理念と実践を架橋するうえで教育機関がどのような役割を担ったのか。とりわけ、日本大学や関西学院のような私立大学の社会学教育がどのような役割を果たしたのかについて、今後研究されていくべきであろう。

注

1) この点については、(レファレンス協同データベース 2020) を参照。

2) この点は、本論の着想を報告した日本大学社会学会100周年記念大会シンポジウムの際に、犬飼裕一教授及び後藤範章教授からご教示いただいた。

3) 森戸は東大をやめた後、大阪の大原社会問題研究所に移り、大阪勞動學校

の講師も務めている。

4）東大社会学研究室に関しては、松井（2004：115-134）がある。

文　献

趙　永哲，2017「C.J.L.ベーツと賀川豊彦の関係についての一考察」『神学研究』関西学院大学神学研究会，64号，53-68.

稲垣足穂，1973『稲垣足穂作品集』新潮社.

関西学院大学社会学部，1995『関西学院大学社会学部30年史』.

越沢　明，2013「知られざる高級住宅地「上北沢」」『家とまちなみ』68，56-60.

丸山眞男，2015『超国家主義の論理と心理』岩波文庫.

松田　忍「永井亨論素描―人口問題・社会道徳・新生活運動―」『松山大学論集』第28巻4号，215-237.

松井隆志，2004「東京帝国大学社会学研究室の戦争加担」『ソシオロゴス』ソシオロゴス編集委員会，28，115-134.

永江雅和，2017『京王沿線の近現代史』クロスカルチャー出版.

永井　亨，1927「日本の社會學徒」『社会学徒』同人社會學徒社，3-4.

中村和光，2015「河上丈太郎の信仰と思想形成についての一考察：関西学院教授時代」『関西学院史紀要』学院史編纂室，21号，35-76.

共同訳聖書実行委員会，1988『聖書』日本聖書協会.

荻野昌弘，2020「社会学的課題としての大学「改革」」『ソシオロジ』199号，83-85.

大宮良博，2011「1世紀のユダヤ世界におけるサマリア人観」『神学研究』関西学院大学神学研究会，58号，25-36

斎藤正二，1976『日本社会学成立史研究』福村出版.

新明正道，1985「―社会学部創設20周年記念講演会―日本社会学の展開」『社会学部紀要』関西学院大学社会学研究会40，13-35.

レファレンス協同データベース，2020，https：//crd.ndl.go.jp/reference/detail?page=ref_view&id=1000025148，2021年1月11にち最終閲覧.

鳥飼慶陽，1988『賀川豊彦と現代』兵庫部落問題研究所.

山本剛郎，1996「コープこうべ成立期の地域社会」『コープこうべ―生活者ネットワークの再発見』ミネルヴァ書房.